

わが日本語初学うひまなびのころ

川崎 宏

わが母国語である日本語を、おやおやのふるさとで私が学習しはじめたのは、生後ほど十年後からであつた。

アメリカ合衆国モンタナ州のロッキー山中の小さい町で生れ、やがてその町のパブリック・スクールに通学、アメリカ市民としての義務教育を受けてゐた。校内唯一人の日本人でもあり私以外の者にとつて私は異色の存在ではあつたが、特別扱ひを受けるでもなく、クラスメートと共に遊び学んでゐた。

二重に国籍を有することも日本人としての教育をと親は考へたのであらう、太平洋の航海二週間、シアトルから横浜への船旅の終るころ、あれが金華山だ、と船上か

ら見えはじめた日本国土を初めて望見したのを覚えてゐる。八月の暑い日の横浜の棧橋に迎へてくれた祖父母の姿、その服装も一種異様に見えた記憶がある。

四国の静かな旧三万石の城下町の尋常高等小学校の尋常一年生の教室に編入され、通学しはじめたのはその年九月からであつた。すでに四月からの学年は一学期を終つてゐた。

むかし殿様の御殿があつた地域なので御殿内とよぶところにある祖父母の家から学校へ通ふ道すぢ、川にかかる石橋を渡り、松の大樹の並ぶ御殿前の広場を過り川に沿ふ土手の小藪との間を流れる小さい溝川べりの道を樽屋、紺屋の前や横を通り、機織

るおばあさんの姿が外からも見える家の前をすぎて校門に到れば、コの字型の校舎がこどもらを抱き迎へるやうに構へられてゐた。コの字型平屋校舎に囲まれた運動場の校門を入つたすぐに二本の丈高いせんだんの木がそびえ、枝を広げてゐた。

日本人として日本語による日本の小学校の一生徒としてのくらしがその時はじまつたのである。当時の、それも言語生活について特に支障があつたり、難点があつたといふ風なことは私の記憶にはない。

家では明治二年生れの武家に育つた祖父が異国生れの孫の教育係であつたが、特別の教育技術を弄するのでもなく、あるいは何らかのてだてを施すすべもなかつたか、ただ漢字をよませることにいささか配慮したもののやうであつた。とはいつてもごく無造作に、やや厚めの漢和字典を手へ、これを探してみつつけよといふ極めて大まかな、けれどもそれはさだかにも有効に文字を確かめ、ことばをしる方法を示されたのであつた。

新聞の見出しに用ゐる大きい漢字やそ

の熟語を読むこと、その字形や部首により、それぞれに関連する音、義などを自づから心得るやうとの配慮からであつたらうかと思ふこともある。

家に架蔵されてゐた書物の中に、改造社版の「日本現代文学全集」と新潮社版「世界文学全集」があり、それらの中から一作一作を読むのにやがて馴れていつたのは、文中の漢字にはすべて読みがなが附せられてゐたから、意義は解しかねるものも、先づは読みたどることはできるやうになつた。内容に文学的感動を覚えるには幼なすぎても時には胸ときめくほのかなはぢらひも無くはなかつた思ひがある。「帝國文庫」の一書、美少年ものは読むことを禁じられた。読むにはまだ早すぎるとの慮りであつたらうか。

雑誌は「少年倶楽部」や「子供の科学」の定期購読をゆるされ、軍艦三笠やエンパイア・ステーツビルの模型組立ての附録に熱中したものであつた。友だちや年長の少年から借りて読む「譚海」^{たんかい}、「日本少年」などがあつた。学校から帰ると山に行き、やど

り木をみつめて、その実をとり、椎の実を拾い、四季折々のこどもの遊びにもすべて加はつて大いに楽しんだ。ことばの不自由を覚えたことは一つもなかつた、と今も思ふのであるけれども、またそのことについて自ら考へてみたり、ふしぎに思つたり、発言をためらふこともなかつた。毎学年の終りには次の学年用の国語と修身の教科書の扉に桜花のふちどりをした「学業優等」の文字を配した朱の印判がおされたのを貰ふのも特異のこととは思はず、自然のなりゆきであつた。

音楽の時間に教はる唱歌のいくつかは今も覚えてゐる。就中その教へられ方のことで印象ぶかい唱歌に「仰げば尊し」がある。この唱歌の歌ことはの発音について、それを指導された女先生のゆるがせにしない厳しさはたしかであつた。尤もそのことはずつと後に多少ことば遣ひについて識ることができるようになつてわかることに属するのだが、「あふげば、たふとし」と歌ふ、はじめの「仰げば」を「アオげば」と誤つてはいけない、「オオげば」と歌ふべ

し、とのおそらくは繰返し注意されたことなのであらう、それを忘れない。文語発音の正しさの一つを伝へ下さつたのである。現今流布の唱歌集や歌曲集にも掲げられ、この歌の音譜の下に記されてゐるカタカナの歌詞表記は殆んど、私の見る限りアオゲバ……とあつて、ことばの、わけても歌曲の歌詞については並ならぬ心くばりを尽すものと思はれる音楽家の無神経か無知による一種の杜撰なのであらうか。

昨今は日本語の読み書きはもとより話すことも、へたなネイティブ・スピーカーよりもことばをかなりに心得た外国人があつて驚かされることがある。すぎし戦^{いくさ}のあとの日本の国語に於ける卑屈な過度の自制や政策による文字や言語統制が、ことばや文字にこめられてきた、心理分化の豊かさを制御し、識字識語能力の歩^{あゆ}まり低下への助長をしたのではないかと、人生はじめの十年のハンディキャップを日本語に持つ、漢文を講ずる日本人の日本語なれその記の筆のついでにうれたみごとの一はしを芸^{げい}窓^{まど}の餘感としてのべ納める次第である。